

合格おめでとうございます。

文化学科一同、皆さんとお会いできる日を今からとても楽しみにしています。

文化学科では、人間というものの奥深さ、この世界の美しさや面白さを、存分に味わうことができます。沢山の新たな出会いに、どうぞご期待ください。皆さんが文化学科で実り豊かな大学生活を送り、広い世界へ羽ばたいていかれることを、心から願っています。

文化学科に合格された皆さんへ専任教員からのメッセージ ～授業で大切にしていること～

N. M. アディソン准教授（イギリス文学、イギリス文化）

担当科目《言葉と文化：イギリス》《英語リーディング》等

私のクラスでは、英国文化について英語と日本語で学びます。コースには、イギリス文化における女性とフェミニズム、英国の物語（映画と文学）と英国の芸術と音楽が含まれます。興味のある英国のトピックを選択して勉強することができます。

奥波一秀教授（音楽文化史、ドイツ文化史、比較文化思想）

担当科目《音楽文化史》《音楽論》等

みなさん自身の問題関心が明確化するように、お手伝いをしています。

川崎公平講師（映像論、日本映画研究）

担当科目《映像文化論》《映像と文化》等

多様な視点から作品や現象を捉え返すことによって、様々な「問い」に巻き込まれてほしいと思っています。そしてそこから自分の考えを構築していくこと。その「方法」を身につけられるよう心がけています。

木村覚教授（美学、ダンス研究）

担当科目《美学》《表象文化論》等

大学での学びは、「他者」を知るレッスンです。自分とは意見の相入れない見解を受け止めたり、謎めいた表現を行う表現者の思いを汲み取ったりすることです。自分を拡張し深めていきましょう。

河本真理教授（西洋美術史、現代芸術論）

担当科目《比較芸術》《現代芸術論》等

私たちが何気なく見ている芸術作品は、実は多様なメッセージをもち、その時代や社会を映し出しています。授業では、西洋美術史、とりわけ近現代美術を多角的に捉え、美術を通して「新しいものの見方」を学んでいきます。

坂井妙子教授（イギリス文化史、ファッション史）

担当科目《地域文化論：イギリス》《社会と文化：イギリス》等

授業では、19世紀のイギリス社会・文化という、限定された内容を主に扱っていますが、個々の事例とその解釈を通して、「歴史を見る目」が養えるように心がけています。

佐々木雄大講師（西洋哲学・倫理学）

担当科目《比較文化史》《文化思想史Ⅰ：西洋》等

授業を通して哲学や倫理学の考え方を理解し、それらを単なる知識として覚えるのではなく、自分なりに世界を把握するための方法として使えるようになることを目標としています。

杉山直子教授（アメリカ文学、アメリカ文化）

担当科目《社会と文化：アメリカ》《地域文化史》等

自分の主な研究対象は少数民族の女性による文学やアメリカ合衆国の人種観ですが、皆さんがそれぞれ自分の関心をさまざまな方向へ広げたりじっくり深めたりするための入り口の一つとしての役割を果たせる授業を行なっていきたいと思います。

高井奈緒准教授（フランス文学、フランス文化）

担当科目《言葉と文化：フランス》《地域文化研究》等

「おしゃれ」「カッコいい」などステレオタイプイメージから抜け出て、様々な角度からより深くフランスを知ること、学生の皆さんが複眼的に物事をとらえ、柔軟かつ論理的に考えることが出来るようになるよう心がけています。

田中久文教授（日本思想史、日本哲学、倫理学）

担当科目《倫理学》《芸術思想史：日本》等

学生の身近な問題から出発し、そこに隠されている普遍的な問題に気づかせるようにして、学生の興味が途切れないように注意しています。

田中有美准教授（日米比較文学・文化）

担当科目《地域文化論：アメリカ》《比較文化論》等

自分とは異なること、自分が知らないことに関心を持ち、誠実に向き合う姿勢を大切にしたいと思っています。

中西裕二教授（民俗学、文化人類学、宗教研究、観光研究）

担当科目《観光と文化》《芸術資料フィールドワーク》等

文化に関する知識をつけ文化の現場に行くと、そこは今までとは違った世界に映るはずですよ。そんな経験を是非文化学科で体験して下さい。

朴倍暎教授（韓国及び東洋哲学、日韓比較思想、韓国文化史）

担当科目《言葉と文化：韓国》《地域文化論：韓国》等

授業では、韓国文化の諸側面を扱いながら、まず日本社会のなかで、韓国を語る意味を問いつつ、現象的にあらわれる韓国文化に関する様々な言説を論理的な言葉に変えていく訓練を行っています。

水野僚子准教授（日本・東洋美術史、表象文化論）

担当科目《芸術文化史：日本》《視覚芸術論》等

多くの文化や価値観が交錯する社会の中で、自分とは何か？と深く考えることは重要です。ビジュアルイメージに隠された様々な問題を自分や社会との関係と照らし合わせ、深く批判的に考えることで、その答えを探すきっかけとなることを目指しています。

三田明弘教授（説話文学、日中比較文学）

担当科目《現代アジア文化論》《言葉と文化：中国》等

古典として残っている作品には、現代に通じる人間の普遍的問題が提起され、考察されているのだ、という事を理解できる授業を目指しています。

B. P. レウルス教授（フランス語、異文化理解）

担当科目《社会と文化：フランス》《異文化体験学習》等

グローバル化時代の今、フランス語を学ぶ理由は様々です。コミュニケーション手段の発達により、豊かな文化を持つフランスはますます身近な存在になりました。地球上のいたるところでフランス語を目や耳にする機会が増えています。フランス語はヨーロッパ・アフリカ・オセアニア・北米をはじめ、多様な世界への扉を開いてくれます。

永井裕子助教（イタリア美術、西洋美術史）

担当科目《イタリア芸術文化史》《地域文化論：イタリア》等

学生・教員との交流や授業など、大学生活の中で、自分が関心が持てる「何か」を見つけて下さい。その関心を掘り下げることが文化を学ぶことです。私の授業ではイタリアを中心とした西洋美術を扱っていますので、興味があればのぞいて下さい。

森下佳菜助教（芸術文化史、日本美術史）

担当科目《視覚文化史》

日本美術のおもしろさだけでなく、いかに様々な影響を受けて発展・展開していったのか、その背景や多様性についても考えていく授業を行なっていきたいと思います。